



Title	現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区(2)：モニカ・パーラさんの事例
Author(s)	千葉, 泉
Citation	Estudios Hispánicos. 2003, 27, p. 101-122
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区 (2)

—モニカ・パーラさんの事例—

Testimonio sobre “el mal de ojo” en Chile contemporáneo: Comuna de Ninhue (2)

— caso de doña Mónica Parra —

千 葉 泉

1. 序

本稿は、現代のチリにおける「邪視 mal de ojo」習俗に関する、一つの具体的な「語り」の記録である。

「邪視」とは、ある人物が視線を通じて他者（人、動物、事物など）に邪悪な作用（病気、死など）を及ぼすという原理であり、今日でも中近東、地中海地方、南アジアをはじめ、世界の広大な地域に分布している。¹

本稿で扱うモニカ・パーラさんは、チリ中南部第八地域ニンウェ区に居住する年輩の女性である。証言当時六十歳の年齢であったモニカさんは、邪視祓い師「サンティグアドーラ」として、十二歳の時から数十年にわたり、区内外の多くの邪視患者を治療してきた。

本稿は、長い経験を持つ邪視治療師であるモニカさんの、邪視習俗の様々な側面に関わる具体的な「語り」を記録したものである。

こうした「語り」を記録する主な目的は二つある。

第一に、純粹に民族学的な目的である。すなわち、従来の邪視研究の中でそれほど注目されてはこなかった、南米南部に位置するチリにおける、現代の邪視習俗に関する具体的な情報を記録することがそれである。²

第二に、「国際協力」のような実践的な目的にとっても、「邪視」を始めとする民間習俗に関して、現地住民の視点を伝える「語り」は示唆に富んでいる。

モニカさんの住むニンウェ区は、近辺の他の多くの農村地帯と同様に、土壌の劣化や灌漑設備の不足、貧困、過疎などの問題を抱えている。そのため、平成12年4月からJICAによって農学専門家が派遣され、区内南西部の小農民村落サン・ホセ地区において農村振興プロジェクト（「チリ住民参加型農村環境保全計画」CADEPA）が実施されている。³

モニカさんはサン・ホセと同じような零細農民の村落レロカの出身で、家庭のきびしい経済事情から、少女時代に首都サンティアゴに数年間移住した経験を持っていた。

帰村後小さなレストランを購入した彼女は、首都のレストランや映画館で働いた経験を通じて修得した経理や経営のノウハウを活用し、その運営に尽力した。こうして、レストランの経営で生み出した資金で、八十ヘクタールの農地を購入することに成功し、自家灌漑機を導入してブドウを始めとする換金作物を植える一方、自家製のワインのレストランで販売するなど、多角的な経営を行っている。

このように、貧困と過疎に悩むニンウェ区の中で、モニカさんは、かなり進取の経営精神や合理的な発想に秀でたタイプの人物であるといえる。その意味で、新しい技術の導入を意図したJICAのプロジェクトにとっても、興味深い帰村者の事例だといえるだろう。

だがその一方で、モニカさんの発想や行動様式には、合理性を超えた認識や発想も強い影響を及ぼしている。なぜなら、彼女自身が有能な「邪視祓い師」でもあるからである。換言すれば、「合理的発想」と「信仰のエートス」とが矛盾することなく、モニカさんの発想の中に同居してといえる。

邪視習俗について言えば、もちろんモニカさんが例外というわけではない。サン・ホセ村でも、カトリックかプロテスタントかを問わず、邪視祓い師や、彼らが実践する「邪視祓い」の受益者⁴は少なくない。換言すれば、合理的発想では割り切れない原理の上に生成する現象が、現地住民たちの間に広く浸透し、現実的な形で機能しているといえる。

以上のように、村人たちに広く共通して見られる認識・行動様式上の特徴を反映する習俗を学ぶことは、純粋な民族学的な興味と並んで、「現地の人たちとともに考える」という参加型プロジェクトの理念を実効あるものとするためにも、有益であろうと思われる。

2. 若干の分析

本稿に記述する「語り」は、2000年7月25日と29日の二日にわたり、モニカさんの経営するレストランで筆者とモニカさんの間で行われたスペイン語による対話からの抜粋である。

以下、彼女の「語り」を記述する前に、内容上示唆深い点をいくつか指

摘しておこう。

（1）「邪視」習俗とカトリック教会との連関

モニカさんの語りには、現在ニンウェ区に住む人々の間に根付いている邪視習俗が、カトリック教会の正統な教義や儀礼の実践から何らかの影響を受けつつ発生したことを想起させるような内容がいくつか含まれている。

第一に、邪視予防の目的で発せられる文句が挙げられる。すなわち、「神の祝福あれ！」という言葉が、邪視に対する、実効ある予防策として認識されているのである。

第二に、「邪視祓い」に用いられる祈祷がある。モニカさんの邪視治療の過程で、「信徒信教」が用いられている。

第三に、「十字架を切る」という、一見象徴的とみえる動作が、実践的な治療効果を持つ技術として使われていることが挙げられる。

第四に、邪視治療と「洗礼」との相対的な関係があげられる。モニカさんによれば、「洗礼」を行った後でなければ「邪視祓い」はできない。なぜなら、洗礼を受けていない子供の邪視祓いを行えば、その子が抱える「原罪」が治療師の身に移ってしまうからだという。

つまり、「洗礼」を経て「カトリック教徒になっていること」が、「邪視祓い祈祷」を行う前提条件とされているのである。言い換えれば、「邪視祓い」という行為が「洗礼」というカトリック教会の正式な典礼構成要素によって相対的に規定されているといえる。

なお、邪視治療を通じ、邪視祓い師と患者家族の間に疑似的な「コンパドラスゴ（代理親関係）」が発生するという指摘も、「邪視祓い」と「洗礼」との関連を示唆している。⁵

第五に、祈祷の回数という一見象徴的とみえる要素も、カトリック教会のある儀礼制度との関連性を想起させる。

モニカさんによれば、子供の邪視の症状が特にひどく危篤状態にある場合、その場で九度連続して「邪視祓い」を行うのだという。また、同一の子供が、普段から何度も「邪視」にかかっている（いわば慢性邪視の）場合、予防策として、やはり「九週間」続けて金曜日に邪視祓いを行うのだという。つまり、「9」という数字に、実践的な治療効果が認識されているといえる。

「9」という数字に付与されているこのような「聖性」は、諸聖人や聖母などに対して行われる「九日間の祈祷（ノベーナ novena）」との関連性も彷彿とさせる。⁶

（2）生産要素と邪視習俗との関連

モニカさんは、人間の赤ん坊や子供だけでなく、動物や植物も邪視にかかる述べ、農耕用虚勢牛の死亡事例に言及している。ということは、家畜の増産や穀物の収穫といった純生産的側面においても、この習俗が直接関係しうることになる。筆者は、モニカさんだけでなく、実際に今日JICAのプロジェクトが実施されているサン・ホセ地区でも、自分が保有する牛や羊、小麦畑などが邪視でやられたという話を多くの住民から耳にした。そのいずれも、現代の事例に関する証言である。

こうしたことから、外部の観察者である我々が、この種の習俗を「真実」と認めるか否かに関わらず、村人たちの間で、（我々がいうところの）「非合理的な要因」が、「家畜の保有数」や「収穫の良し悪し」といった、いわば「純経済的な尺度」に対して影響を与える要因の一つとして認識されている、という事実を学ぶことができる。

換言すれば、ともすれば経済現象を「合理的」な要因のみで解釈しようとしがちな我々の狭い発想、視野に対し、現地の農民たちは、より幅広い、多様な要因を包含するパッケージでこの種の現象を解釈している、という厳然たる事実を示しているのである。

このことは、「住民参加型」の農村振興プロジェクトを展開する上で、「現地住民の視点や発想の特徴を学ぶ」ことの重要性を示唆する事実だといえるだろう。

3. モニカ・パーラさんが語る邪視習俗

<邪視祓い習得の次第>

（筆）では、直ちに「邪視」の話題に移りまして、とても興味があるんですけども、あなたはどのようにして「邪視祓い」を覚えたのですか。

（モ）邪視祓いの術を知っていた叔母に教わったんです。

（筆） ああ、叔母さんですか、ほう。

（モ） ええ。覚えたのは私が12歳の時でした。

（筆） はあ、はあ、はあ。

（モ） あの人が知っていてね。それで、あの人が時間が取れないってことがよくあったの。それで、私にお祈りを書いてくれたのよ。というのは、お祈りを唱えるのだけど、それを紙に書いてくれて、それであとで私はそれを覚えたの。それで、私は邪視祓いを続けたってわけ。私は多くの人々、つまり、多くの子供の邪視を治してきたの、大人じゃなくて・・・。

<子供が「邪視」にかかる理由>

（筆） いつも子供なんですか。

（モ） 子供よ。いつも子供なの。ええ、大人は違う、というのは・・・、そういう人たちは邪視にかからないもの。

（筆） へえ、そうですか。一体なぜですか・・・。

（モ） いつもね・・・、というのは、子供は弱いでしょ。何だかんだといって（大人は）子供を愛でるのに、「神の祝福あれ。」とは言ってやらない。というのはそう、人はいつも「神の祝福あれ。」と言いなさい、っていうのよ。で、もしそう言うことなく、「あら、何てかわいい子供でしょう！何とかわいい子供かしら！ほらあんな風に・・・。」なんて言ってしまう。それで、どんなおふざけであっても、子供がすることを愛でるけれど、そう言ってやらない、すると子供は邪視にかかってしまうのよ。左目が小さくなって、熱が出て、泣き始めるってわけ。

そうになると、もうどうやっても泣き止まない。どうやっても鎮まることはないの。そしてついには・・・、邪視祓いしてくれる人を探さないとなくなるとなるのよ。私でも、他の誰でも、邪視祓いの術を知っている人をね。とにかく邪視を祓ってやらないといけない。邪視祓いしてもらわないとね。

たとえ医者のところへ連れて行っても、医者はその子を・・・。どんなにいい医者でもね。医者はその子を検査するでしょう。注射を打ってやるかもしれない。薬やら何やらを与えるかもしれない。でも熱

は下がらないし、治りもしない、その・・・、邪視はね。

邪視は吐き気を伴うもの。熱が出るとともに吐き気を催してね、で吐き気から始まるの。

<重度の邪視の事例（１）>

(モ) 私は三人の子供を救ったことがある、本当に・・・、四人の子供をね、でもそれは、とてもとてもとても重症で、もう病院では手の施しようがないっていう状態だった。

(モ) 最初の子、私が邪視祓いした最初の女の子、それは私が15歳くらいの時だったわ。私がその女の子を救ったの。叔母さんが呼びにやられたのだけれど、叔母さんは行くことができなかった。で、私が行ってその子の邪視を祓ってあげたのよ。それでその子は助かったってわけ。

(筆) 危篤だったんですか。

(モ) 危篤だった。でもその女の子は助かった。その後、お母さんは私に感謝してね。それからはずっと「コマドレ」⁷って呼ぶようになったのよ。というのは、自分の赤ちゃんの邪視を祓ってあげると、見なされるの・・・、その人の「名付け子」のようなものになるんだって言ってね。それで彼女は私のことを「コマドレ」って呼んでいたのよ。そう。うん。ずっと私に感謝していたわ。

で、その後も私は子供の邪視を祓い続けた。でも、本当に重症だったのはそのケースでしょ。

で、それから私には、ある男の子の名付け子がいたの。その子は(正式な)洗礼を通じての名付け子だった。で、ある日私はチジャンに行こうとしていた。買い物をする用事があったね。そうしていたら、人が私を呼びに来た。家に、呼びに来られたのよ。緊急にお願いしたいので、上手の、あの二階建ての家があるところに行って欲しいってね。上手のその大きな家に、その家があるところに、その家に住んでいたの、私のコマドレ⁸はね。

(筆) はい、はい、はい。ええ。

(モ) で、子供がひどい状態だから、診に行行ってやって欲しいってね。私は出かけたわ。そっちに着いたの。子供はベッドに横たわっていた、こうぐったりとして何も・・・。もう、・・・、白目を向いてね。何も

しゃべらなかった、何も、何も言わなかったわ。で、それで私が邪視祓いをしなければならなくて、その子に邪視祓いをやってやらなければいけなかった、ええと・・・九度ね。

(筆) ああ、ほう。でも、九日間ということですか、それとも、その日のうちに九度繰り返したってことですか。

(モ) その場で九度よ。九回ね。

(筆) 同じ事を繰り返すってということですか、でも九回だと、つまり。

(モ) 同じ事を繰り返すの。で、私がお子さんを救ってあげられるためにね。それでね、その子供に、私は九度邪視のお祓いをしてあげたわけ。その子供はそれから動き始めたの。動いて、動いて、動き始めて・・・。

で、ある奥さんがいて、その私のコマドレのところへ遊びに行ったってわけよ。その子は遊び回っていたの、アヒルと一緒にそこいらを駆け回って、アヒルを掴んだりしてね、するとその子が、「まあ、なんてかわいい子なの。ほら、あんな風にアヒルと遊んで。」、なんてその婦人は言い始めた。それで、その子供に対して、それ以上何も付け加えなかった。それで、その男の子は邪視にかかってしまったの。私の洗礼子だったその子がね。

私はチジャンに行き損なったってわけ。チジャン行きは後回しにしなきゃならなかった、というのは、やらなけりゃ・・・、邪視祓いしてあげられるため・・・、あの子と一緒にいてやるためにね。それに私の洗礼子だったしね。それで、「わかったわ。」とね。

それから、その後、ある女の子が私に・・・。歳は十一で・・・、やっぱり私は始めたの。かわいい子でね、その子は・・・、美しかったわ。やっぱり吐き気とかね、熱が出始めたの。診療所に連れて来られてね。抗生物質やいろいろなものを飲ませただけど。治らなかった。

それでコマドレはこう言ったわ、「ご覧なさい、娘は邪視にかかっているに違いないわ。」ってね。その子は腕に抱えて連れられてきたの、だって歩ける状態ではなかったのでね。それで・・・鉛みたいに硬直して、毛糸玉のようにね。手を放すとぐったりとしてね。それでここに連れてこられたわけ。その子も私が邪視祓いしてあげるとすぐに治ったのよ。それ以上悪くはならなかった。

というわけで、そうしてやったら少し眠ったの。というのは、邪視祓いをしてやる時にはね、赤ン坊や子供を邪視祓いしてやる時には、寝かせて、例えばメリッサ（ハッカの一種）の煎じ汁でアスピリンを一錠飲ませて、その子をしっかり覆ってやるわけ。覆ってやってしばらくの間横にさせておくの。そうそうそう。

(モ) ええ。

(筆) で赤ン坊を暖かくしてあげるの。するとなぜか、赤ン坊は汗をかく。邪視祓いでリラックスするので汗をかくの。どうしてだかはわからないけど、でも赤ン坊は汗をかくので、そこで体全体を覆ってやるの。そうしてやったところで、その子を立たせ、外に連れ出してもいいのよ。ちっちゃな赤ン坊も同じように、すぐに覆ってやる。しっかり覆ってやると、汗をかく。で、服を脱がして、新しい服に着替えさせる。赤ン坊は汗びっしょりになり、病気になってしまうからね。風をひいてしまうから。

(筆) そうですね。

(モ) そう。それで、ええと・・・、もう一人男の子・・・、女の子で邪視にかかった子がいたの。九歳だった。看護婦さんの、ここの診療所の看護婦さんの娘でね。であのね、彼女は娘を病院に連れて行ったのよ、キリウエのね。だって看護婦なんだから知らないはずはないでしょ。キリウエに連れて行って、医者に診てもらったわけ。二人の医者に診てもらったの。

(筆) ええ、当然、といいますか。

(モ) ええ・・・、薬やいろんなものを与えたんだけど。女の子は熱が下がらなかった。相変わらず吐き気が続いてね。

今度はチジャンに連れて行ったの。またチジャンの個人のドクターに診てもらったのよ。病院ではなくて個人のドクターのところに連れて行ったわけ。でもその子は全く治らずにここに戻ってきたの。

でも、その女の子はもう、あまりにも強く邪視にかけられたので、というのは、中には持っている人が、普通より強い血の人がいて、視線が普通よりも強いっていう話よ。それで女の子は（邪視の症状が）始まって、もっとどんどんひどい状態になり始めってわけ。

それで私が行ったの、じゃなくって、お父さんがね、つまり、以前に邪視祓いしてあげたことがあったのでね。私はこれまでに百人以上、

というか、二百人以上に邪視祓いをしてきたのよ。一体何人にやってあげたかしらね。というのは十二歳の時から邪視祓いをしてきたのでね。で、以前すでに私はこの若いお父さんの子供を邪視祓いしてあげたことがあったの。でもあの人あまり信じていなかった。こうした事にあまり信心を持っていなかった。「いいや、そんなものは存在しない。」とか言ってね。

でも、男の子が病気になったとき、あの人のお母さん、というか、奥さんのお母さんが言ったの、「モニカさんと呼んできなさいな。」って言ってね、「この子の邪視を祓ってくれるから。」ってね。（結局）子供は治ったわ。彼女は女の子があまりにもひどい状態なのをみて、私を呼びにやらしたってわけ。

で、私は丁度あれにやられていてね・・・、パスモ（筋肉収縮状態）にかかっていたの。以前、私はここでパン屋をやっていた。毎日自分の家でパンを作らなきゃなかった。中にあるテーブルだけど、キッチンにあってパンで山盛り、パンで一杯だったの。で、うちのコンロは二層式なので、私がパンを焼いていたところ、丁度この・・・、小雨が降っていて、私は頭にパスモを受けてしまった。この全部がこっちにあったのよ。いろいろなもので濡れていて、頭には決して・・・。風に当たってはいけない状態だったのね。

というわけで、私はバンの後部座席に乗り込んだ。そのバンで邪視祓いに出かけたの。

あちらに着いて、私は女の子を見てみた。すると、とってもひどい状態だったの。私はこうつぶやいた、「うーん。この子は・・・、よし、神様に救ってもらうしかないわね。」で、この子の場合も九回邪視祓いをしてあげたの。（中略）

<邪視治療法>

（モ）で、「邪視祓い」とは何かっていうとね。それは九度のクレド（信徒信経）で、それを唱えるの。一回ごとに九度クレドを・・・。つまり、最初に左側のところでクレドを三度、この左側でね、で、（次に）三度クレドを額のところで、で（最期に）三度クレドをここ（右側）でね。それから自分が知っている（特別の）お祈りをする。お祈りはこ

ちら（左側）からやるって言われているの。つまり、そうした事だけやるの。それが邪視祓いよ。

私はロウソクは使わないわ。というのは、ロウソクで、いろいろなものを使って、そうした事を邪視祓いをする婦人たちもいて、私が知らないいろいろなことを（患者に）してやるのよ。私のはとても簡単なの。ただクレドとお祈りを唱えて、それは、何ていうか、私が思うに邪視祓いにおいて一番重要なものよ。それからあのね……。

（筆）そのお祈りですけど、どういうタイプのお祈りなんですか。

（モ）そのお祈りはね、ええと、その同じクレドの文句の中から作り出したものと、もう一つ別のお祈り、それは邪悪なものを取り去るためのものでね、いろいろそうしたものなんだけど、祈るときにはね、十字を切ってやる。すべて十字を切りながらやるの、すべて十字の形で、すべてを十字を切りながらね。それで後でもうクレ……、九回、九つお祈りする時にね。想像してご覧なさいな。クレドいくつになるかしら。九回を九度よ。計算してご覧なさい。

（筆）ええ、つまり、八十一回です。

（モ）その通り。そんなにも九回、同じものを繰り返す、同じものを九回、女の子が助かるようにね。なぜなら、そうしなければその子は助からないのよ。（中略）

でも、緊急な時は、たとえばその場合みたいにね、九度やるわ。その場で祈らなければならないの。それで私はそのあと、女の子を救ってあげた。私が帰ってきた時には、女の子はベッドの上に座ってお母さんにビスケットをねだったの。ビスケットを食べ、ジュース、飲料を飲んでいたので。

（筆）治ったんですか。

（モ）その通り。奇跡だったわ。というよりも、彼らにとっては奇跡だったのよ……。

<邪視予防法>

（モ）それから、邪視にかかる度に、というのは子供はかかり癖がつくことがあって、あのね、邪視にかかり始める、ひっきりなしに邪視にかかるようになることがあるの。だから、そうした子供には、あの日お話

ししたように、九回連続で金曜日に邪視祓いをしてやらないといけないのよ。

(筆) ああ、九度金曜日にですか。

(モ) 九回金曜日にね。

邪視がとても強力な時は、すでにあなたに説明したように、この、例えば、あまりにも強い邪視の場合はね、同じ日の同じ時間に九度邪視祓いをするの。

(筆) いつも金曜日にですか。

(モ) で、それ以外の場合には、いつも金曜日にするの。九度、九回金曜日にね。九回金曜日に邪視祓いをしてやると、その後子供は元気になるの。もう邪視にかかることはなくなる。で、それも秘伝の知識なのよ。ええ。

(筆) ああ、恒常的な邪視祓いのようなものですね。

(モ) 恒常的なものよ。そう。だから、九週間連続で金曜日にやり、そしてその九回の金曜日が過ぎるでしょ。するともうその子はね、どんなにてもはやされても何も起こらないの。もう「邪視のお祓い」が体内に入っているのね。それでもう・・・。

(筆) 加護というか。

(モ) ええ。ご加護がね。そう。

<家畜も邪視にかかる>

(モ) 動物だって邪視にかかるのよ。動物にも邪視治療を施すの。動物の場合は、パルキ⁹の枝で邪視を治療する。パルキの枝でね。

(筆) ああ、パルキの枝でですか。

(モ) ひとふしの・・・。ええ、パルキよ。それを取って、一枝を切り、動物の体の上でこんな風に十字を描いてやるの、そうすると・・・。動物も邪視にかかるのね。

一度、すぐここいらで、あっちに、サン・アグスティンに向う街道沿いで、聖地¹⁰があるところでね・・・。

(筆) ああ、ああ、ああ。はい、はい、はい。

(モ) 一對の虚勢牛が働いていた、地面を耕していたのよ。その時、ちょうどある男性がやってきてこう言ったの、「ほう、なんて立派な牛だろ

う！こんなに丸まる太って！」って。それだけ。それ以上は何も言っていないの。

それで、ここいらの人はふつう、家畜に「神の祝福あれ！」って言うことにしているの。「何て見事なんでしょう、神の祝福がありますように！」ってね。それでそういう風に言わなかったのが、大体二十分ぐらいで、家畜たちはみな地面に横たわっていたの。

(筆) そんなに強い邪視だったんですか。

(モ) 強い邪視でね。死んでしまった、ええ、逝ってしまったのよ。(肝が) 破裂してね。

(筆) ああ、死んだのですか。

(モ) ええ、だって突然死んでしまうのよ。ただちに胆が破裂してね。死んでしまうの。

(筆) 即死ですか、つまり。

(モ) 死んでしまう。ええ。死んでしまうの。

(筆) ということは、家畜の場合もやはり「神の祝福を！」って付け加えないといけないんですか。

(モ) その通り。やっぱりね、で「神の祝福を！」ってね。何の場合でもね。とにかく人が綺麗だと思うもの、・・・で、何も(魔除けの言葉を) 言わないとね。そうすると植物でも花でも、何でもね。

(筆) ああ、やはりそうなんですか。

(モ) 同じようにね。何でも、自然物であっても何でも、そうなの、何でもね。植物も邪視にかかり、動物も邪視にかかり、鳥も邪視にかかり、なんでも人が美しいと感じたときに、何も(魔除けの言葉を) 言わない、そうするとね。それは何ていうか、それはとても古くからある習俗なの。

< 重度の邪視の事例 (2) >

(モ) 例えば、私が、何と云うか、ある女の子を救ったと言ったでしょ、それは、その子はとてもひどい症状だったんだけど、私が救ったとお話したのを覚えてますか。

(筆) ええ、ああ、はいはいはい。ええ。

(モ) ええ。その後、また別の時にね、いや、私が邪視治療してやったのは

ね、一体何人の人・・・、子供を治したかわからないくらいよ。また別の時のことなんだけど、ある奥さん、私の友達で子供が13人いる人なの。

(筆) 13人ですか。

(モ) 13人よ。彼女も（私と同じ）レロカ地区生まれでね。彼女もレロカ出身なの。で、その地あたりの若者と結婚して、このニンウェ集落の、ロス・カルドネス地区との境の場所に土地を買って住み着き、家庭を築いたの。(中略)

でね、彼女にはある男の子、息子がいて、年は九つぐらいか、九歳か十歳だった、だいたいね。その子を病院に連れていったのよ、重症だと見てね、ここの、ニンウェ（の診療所）から、キリウエの病院に送り込んだの。病院に連れて行ったのよ。そこにいた、病院にいさせたの、二日か三日の間よ。重症でね、一向に回復しなかった。

それで医者、私が会いに行ったとき、医者はあの人にこう言ったの。「息子さんを連れてお行きなさい。というのは、息子さんはもう手の施しようがありませんから。あなたの息子さんは重態です。ええ。」彼は言うの。「私は、息子さんを救うために出来る限りの手は尽くしました。でも、全く原因がわからなかったのです。」ってね。「連れてお行きなさい。」って。「連れて行って、ロウソクをお買いなさい。それで、ロウソクを持って家にお帰りなさい。」ってその医者は言ったわけよ。

(筆) ふうむ。

(モ) それで彼女は、彼女がどうしたかっていうと。この街に帰って来てここに着いたの。

ここにある、ほらその椅子のところにね。その椅子はもう長年ここに置いているんだけど。ここに来て、子供を抱いたままそこに座ったの。その子はといえば、死んだようにこんな目をしていて、白目を向いてね、いわゆる、目が上を向いてね。

それで、「あのね」って私はあの人に言ってやった。「この子は邪視にかかっているよ。」ってね。「まさか！」って私に言うの。「そうよ、なんで息子が邪視にかかっているなんてことがあるかしら、だってお医者さんがこう言ったのよ・・・。」「この子は邪視にかかっています。」って私はあの人に言ってやったの。「視線を見てご覧なさい。片目が

小さくなってるでしょ。だからね、・・・。」って。

邪視にかかっているときは目がね、目が小さくなるの。左目がこんな風になって、小さくなる。それですぐにその子供が邪視にかかっているって気付くわけよ。それに吐き気ね。特に、吐き気がひどくなる。そういったことが邪視の兆候なのよ。まず嘔吐から始まるの、吐き気からね。

それでね。私は言ってやった、「この子は邪視にかかっているわ。」ってね。彼女はこう言うの、「いいえ、そんなことあるもんですか。どうして邪視にかかっているなんて。」と。私は「間違いないわ。」って言ってやったの、「あのね、私が邪視祓いをしてあげるから。この子が助かるかどうかは神様がお見通しよ。」って言ってやった。「で、あなたが買いに行こうとしているロウソク、この子の通夜で使うことになっているロウソクだけれど、それをここに持って来なさいな。」って。「それを聖母様に捧げましょうね。」って。こんな風に、文字通りこういう言葉をね、(子供が治るところを)あの人に見せてやりたかったわ。

それで彼女は出て行った、子供を椅子に横たわらせてね。だってその子はまったく動きさえしなかったんだから。あの人にはロウソクを探しに行き、私はその場でお祈りを始めた。あなたに言ったように九度のお祈りを、九度のね。それで、最後のお祈りを子供に対してし終えた時にね、子供はひとりで椅子の前に立ったの。というか、頭を持ち上げてね、座ったのよ。自分でね。

(筆) 自力でですか。

(モ) 自力だよ。ひとりでね、私がその子のところに行って動かしてやる必要なんてなかった、だって子供は自分ひとりで立ち上がり、その椅子に座ったんだから。で、そのことは、あの人に・・・、想像してご覧なさい、病院では葬式を挙げてやるために、連れて行きなさいって言われていたんですからね、それなのに、子供は立ち上がり、それで助かったんだから。

というわけで、あの人買いに行ったロウソクは、その子の葬式に使うはずだったロウソクだけれどね、聖母様のために点けてあげたの。で、その子はお母さんに食べ物を求めたの、お腹が空いていたのでね。というのは、もう何日も食べておらず、だって病院にいたのでね。そ

れで、ビスケットを買ってきてやって、ヨーグルトを持ってきて、子供に与えたのよ。そのあと、家に連れて行ったの、子供は歩いてね。そんな風だった後なのにね……。

(筆) 子供は歩いて帰ったんですか。

(モ) 歩いて帰ったの。そんな風だったのに、もう手の施しようがないって言われていたのにね。だから、あの人は言うの、「あの子はある子の息子よ。」って。私たち、幼な馴染みの間柄なので、「あの子はある子の子よ。」って言うの。「あの子はある子が救ったの。」ってね。

でも、私の「洗礼子」は、絵葉書一枚も、年始やクリスマスの挨拶の言葉すらも全く送ってよこさないの。というわけで、その子は元気になって、今ではもう大きくなった。でも、私が自分を救ったってことは知ってる。彼はその事をしっかり心に刻んでいるわ、私が邪視祓いしてあげたこと、で、そのために自分が助かったってことをね。さもないと、あの子は助かりやしなかったわ。

<邪視による死亡事例>

(モ) だって、何人も子供が亡くなっているんですからね。死んでしまうことがあるのよ。

(筆) そうなんですか。

(モ) もちろんよ。亡くなることがある、もし邪視祓いが間に合わなければ、子供は死んでしまうの。

(筆) 例えば、ここ、この、何と言いますか、村でもそうなんですか。

(モ) ええ。子供が死んだことがある。ええ、ええ。子供が間に合わなくて、親が子供を連れて病院にたどり着くことさえできないことだってある。その前に死んでしまうのよ。そう。というのは、胆が破裂してしまうのでね。

ここ、コイピンの、先日私たちが一緒に行った私の家の正面に、ユーカーの木の家正面にね、その奥さんにはとても可愛い女の子がいたんだけど、その子が邪視にかかったの。それでその、それであの人は病気だと思って、チジャンの病院に連れて行ったの。列車の線路が通っているコチャルカに着いたの。そこに着いたんだけど、そこで女の子は死んでしまったの。連れてきた時にはもう胆が破裂していた。

その子の胆は破裂してしまったの。もう胆が破裂してたことは明らかだったわ、だって黄色くなるもの。だから・・・。

(筆) 邪視だったと。

(モ) 邪視だったのよ。邪視だった、というのは、どういうことかっていうと、片目を閉じていたのね。片方の目が小さく閉じて、そんな風になっていた。でもう一方が半開きの状態でね。だから、邪視だったのよ、ね。

(筆) でそれはいつの事だったんですか。

(モ) 今から、今から大体、その女の子は・・・、大体もう20年前のことね。わたしがパルセラを買ったばかりの頃だった。私がそうしたのは17年前のことだけど、その時、もうそのことがあってから四年立っていたの。そう、買ったばかりの頃。

で、その家族の人たちはみんな美男美女なのよ。青い目をしていてね。あのね、奥さんは目が青いし、(その子の) お父さんは目が青かったの。朝黒で、肌は浅黒いんだけど、青い目をしているのよ。で、子供たちは皆青い目に生まれたの。ええ。きれいな目をしてね。

それで、だから子供たちは可愛いと邪視にかかるものなの。たいそう可愛がられるでしょ。あまりにも注目されてしまうのね。ええ、そう。じっと見られてね・・・。そう。ええ、邪視になってしまうのよ。

(筆) それでは、何と言いますか、邪視にかける人たちは、普通自分が邪視にかけてしまう傾向があることを知っているんですか、それとも知らないんですか。

(モ) 無意識にそうしてしまうの。

(筆) ああ、無意識になんですか。

(モ) そう。というのは、例えば、私があなたの子供にこう言うとするわね、でも私はこういうことが起きるって知っているから、誰かがその子に、「可愛いお子さんですね！」って、彼女がその子に「ええと、何て可愛い男の子なこと！」たったそれだけのこと。すると、その子はもうすぐに邪視にかかってしまうの。で、こうしてすぐに兆候が、吐き気が始まってぐったりしてしまう。気分が悪くなったように倒れるの。・・・し始めるの。・・・無しにね。

(筆) やっぱり悪気はないのにですね。つまり無意識のうちに、と。

(モ) ええ、ええ、ええ、ええ。無意識でね、まったく。そうになってしまう。
だから・・・。

<「邪視祓い」の前提としての「疑似洗礼」>

(筆) それでと。やっぱりお聞きしたかった事がありまして、つまり、いくつかの地域で、人は自分の子供が邪視にかかっていると感じた時、ええと、ある時には、例えばあなたのような邪視祓い師のところに連れて行くと。

(モ) ええ、(普通の) 家にね。

(筆) で、また人が言うには、むしろ教会に連れて行く場合もあるそうだと、神父に診てもらうためにつて。

(モ) いいえ。教会に連れて行くのは、子供が洗礼をまだ受けていない時よ。子供が邪視にかかるでしょ。例えば、子供が、赤ン坊が邪視にかかり、まだ洗礼を受けていない時は、邪視祓いを施すことはできないの。

(筆) あなたがですか。

(モ) ええ。私は邪視祓いすることはできません。だから、教会に連れて行って、神父さんに聖水をかけてもらわないといけない。でも(正式に) 洗礼するわけではないのよ。そうじゃなくて、聖水をかけるの。というのは、というのは、昔は、ここで子供が生まれたときの習慣なんだけど、子供が生まれた二日後に、ある婦人のところに連れて行って聖水をふりかけてもらうの。

(筆) ああ、ほう、あるご婦人ですか。

(モ) ある奥さんなのよ。「聖水をかける」っていうんだけどね。「邪視祓いをする」とも言うんだけどね、でも言ってみれば、つまり、「邪視祓いをする」ではなくて、聖水よ、つまり、聖水が・・・。

(筆) つまり、「聖水をかける」というわけですね。

(モ) ええ。持っていくものは、例えば、白い布、ロウソクね。であの人が白布を使って聖水を頭にかける、洗礼式と同じようにね。

で、ロウソクに火を灯して名前を付ける、子供の名前をね。で、それで例えば、必ず代母と代父を連れて行かなければならなくて、(正式な洗礼式の) 代父母になる人の代わりにね、もし後で同じ人がなるのであればよ。というわけで、略式洗礼みたいなものよ。

で、そうしておいて、その後なら邪視祓いを行うことができるの。いつでも好きな時に邪視祓いをしてあげられる、なぜってその子はもう罪から解放されていますからね。というのは、この時点で、もし邪視祓いを受けて（「洗礼されて」の間違い）いなければ、罪を抱えていることになるの。だから、その状態では、邪視祓いをしてあげることとはできない。そうでなければ、邪視祓いは受けられないの。私は一度も、聖水を受けずに来る子供には、一人だって邪視祓いはやらないわ。

(筆) はあ。

(モ) だからいつでも私はこう聞くの、「(この子は) 聖水は受けていますか、奥さん。」って。で、そうしてから私は邪視祓いをするの。

(筆) でも、何か悪いことが起きるんですか、もしあなたが子供に邪視祓いを施したら、まだ受けていない子供に・・・。

(モ) その通り。ええ。自分に、自分に、自分の方に移ってしまうの。つまりね・・・。

(筆) あなたの方にですか。

(モ) そうなの。私に。私の方に、というよりも、邪視祓いをする側の人間にだわね。赤ン坊、そんな風に聖水を受けていない子に邪視祓いを施すのは罪なのよ、

(筆) はあ。

(モ) なぜって、私の方が子供の罪を背負うことになるからね、両親の抱える原罪をね。それで、その罪を私が背負うことになる。だから、邪視祓いをしてもらうには、聖水を受けていないといけないというわけよ。

(筆) ということは、最初に聖水をかけて、その上で邪視祓いをするの。

(モ) 聖水が最初で、邪視祓いをするのはその後なのよ。

<聖水係の職を与えられた婦人>

(筆) なるほど、なるほど。では、あなたのおっしゃるその聖水をかけるといふ奥さんは、つまり神父ではないのですね。

(モ) ええ、ええ、ええ。それは、ここの角のところに住んでる奥さん、お婆さんよ。

- (筆) はあ、ああ。何と言う名前ですか。
- (モ) そのお婆さんに明日話を聞くことができるわ。
- (筆) ええ。
- (モ) そう、そう。ロサ・バスケスさん。
- (筆) ロサ・バスケスさんですか。
- (モ) そう。ここの、区役所の向かいの角のところに住んでるの。お婆さんでね。彼女がニンウェでただ一人聖水をかけることのできる人なの。ええ。で、彼女と神父さんとね。
- (筆) はい、でも何故彼女が任されたんですか、何と言うか、その職……。
- (モ) その職を与えられたのは、ここニンウェに別の神父が住んでいたときよ。リトラ神父、お爺さんでね、スペイン人の神父よ。
- (筆) 何という名前ですか。
- (モ) リトラよ、スペイン人だったの。
- (筆) スペイン人ですか。
- (モ) そう。で、その人が彼女に邪視祓いをするための権限を、というか、その職をね。それで、彼女が邪視祓いをする（「聖水をかける」の間違い）ことを認められている唯一の人物なのよ。（中略）
- 彼女は子供にお祈りをして、それから聖水をかけるの。
- (筆) ああ、ああ、はい、はい。
- (モ) それでこう言うの。「何々の名前で汝に洗礼を施す。」それから、神父がやるのと同じよ。教会の中での（通常の）お祈りとは違う（洗礼の時と）同じ祈りの文句を言うの。
- (筆) でも、はい、それでは、聖水をかけるという事実は、ええと、そのお婆さんが聖水をかけるということも、やはり何らかの治療効果があるんですか。
- (モ) やはり治療的なものがね。ええ、というか、それは彼女がやることだけよ。彼女は邪視祓いはしない。というか、違う……。彼女は聖水をかけるだけ。もちろん、邪視祓いをする人が、邪視祓いすることが出来るようにそうするのだけどね。
- (筆) なるほど、では、つまり、最初にその人が聖水をかけて、それから例えばあなたのところへ来るようにと。
- (モ) その通りよ。

4. 注

1. 古代から19世紀までの各地における邪視習俗の変遷については、エルワージ（1992年）：14-54頁参照。現代における、世界レベルでの邪視現象の分布については、清水（1985年）：91頁、および医療人類学研究会（1996年）：162頁参照。また、現代のイタリア（サルデーニャ島）、スペイン（グラナダ地方）の邪視習俗については、それぞれ井本（1999年）、Gómez（1992年）：185頁を参照。
2. チリの邪視民俗に言及した研究としては、O. Plath（1981年）：pp.31-35、Parker（1992年）：pp.57-62.が挙げられる。
3. 同プロジェクトについては、『チリ住民参加型農村環境保全計画短期調査員報告書』（平成11年）、平成12年度海外村づくり基礎調査事業（平成14年予定）参照。
4. モニカさんの娘マリアナさんもやはり邪視祓い師である。マリアナさんに自分の娘の邪視を治療してもらった男性住民の事例については、千葉（2001年）を参照のこと。
5. 邪視祓いを契機として発生するコンパドラスゴについては、第九地域に在住する女性邪視祓い師（ピントさん）も同様の発言をしている。（千葉（2002年）：46頁参照。）
6. ピントさんも、やはり慢性的な邪視治療の方法として、九日間の邪視祓い祈祷に言及している。（千葉（2002年）：42頁参照。）
 なおモニカさんは、予防策として祈祷を行う場合、これを「金曜日」に行うということから、「金曜日」という日にも治療上の効能が付与されていることがわかる。一方ピントさんは、邪視予防の目的で、金曜日の他に火曜日も組み合わせて計九日間祈祷を行うと指摘している。こうした特定の「曜日」のもつ「聖性」については、今後の検討課題としたい。
7. 「コマドレ comadre」 本来は、子供の実の両親が洗礼によってその子供の代母となる人物に対して、あるいは代父母が子供の実の母親を呼ぶ時の呼称。子供の邪視を治療してもらった親と邪視祓い師との間にも、いわば「疑似的洗礼親同士」とでもいうべき人間的な絆が生じることがわかる。

8. 「コマドレ」 この場合は、正式な洗礼を通じた、本来の意味での「コマドレ」をさす。
9. 「パルキ palqui」 ナス科の低木。チリでは、ヨーロッパ系住民のみならず、南部に帰属する先住民マプーチェたちの間でも、「魔除け」の目的で使われている。
10. 「聖地 santuario」 19世紀末にチリと、ペルー・ボリビア連合軍の間で、硝石地帯の開発をめぐる勃発した太平洋戦争（1879-1883年）の時の英雄アルトゥーロ・プラッがニンウェで生まれ育ったことから、プラッが幼少時を過ごした家が改造され、博物館になっている。「聖地」とは、この博物館のことをさす。

5. 参考資料

(1) MD録音

Parra, Mónica, *testimonio de doña Mónica Parra*, comuna de Ninhue, 8ª Región, 25 y 29 de agosto de 2000.

(2) 文献資料

千葉泉、「現代チリにおける「邪視」習俗に関する証言：ニンウェ区 (1) —エラスモ・ラミレス氏の事例—」、*Estudios Hispánicos*、No.26、2001年、205-221頁。

千葉泉、「現代チリにおける「邪視」習俗：トライゲン区 (1) —エレナ・ピントさんの事例—」、『大阪外国語大学論集』、第27号、2002年、35-58頁。

『チリ住民参加型農村環境保全計画短期調査員報告書』、国際協力事業団、平成11年。

エルワージ、F.T. (奥西訳)、『邪視』、リブロポート、1992年。

Gómez García, Pedro (ed.), *El curanderismo entre nosotros*, Granada, Universidad de Granada, 1997.

平成12年度海外村づくり基礎調査事業、『平成12年度ボリビア・チリ農業・農村社会構造基礎調査報告書』、農村環境整備センター、2002年（予

定)。

井本恭子、「サルデーニャの村落と ocru malu —ひとつの人類学的解釈—」、『大阪外国語大学論集』、第21号所載、155－174頁。

医療人類学研究会（編）、『文化現象としての医療』、メディカ出版、1996年。

Parker G., Cristián, *Animitas, machis y santiguadoras en Chile*, Rehue, Santiago, 1992.

Plath, Oreste, *Folklore Médico Chileno*, Editorial Nascimento, Santiago, 1981.

清水芳見、「邪視研究の動向」、『民族学研究』、48/1、1983年6月号所載、91－100頁。